

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol.4

Barry Harris【バリー・ハリス】

～ビ・バップの真の伝道師 & 玄人好みの名ピアニスト～



Profile

Photo by Francis Wolff (c) Mosaic Images

1929年12月15日生まれ。ミシガン州デトロイト出身。母親からと教会においてピアノの教育を受け、14歳の時にジーン・アモンズと共演。ハイスクールバンドで腕を磨き、44年「パラダイス・シアター」主催のアマチュア・ショーで優勝したのを機に、プロ入りを決意。サド・ジョーンズやブルー・ミッチェルなど、地元デトロイトのミュージシャンと共演を重ねる。54年にデトロイトの「ブルーバード・クラブ」のハウス・ピアニストとなり、レスター・ヤング、マイルス・デイビス、チャーリー・パーカー等と共演。55年に自動車事故で亡くなったリッチー・パウエルの後任としてマックス・ローチのグループに参加。58年に初リーダー・アルバム『プレイキン・イット・アップ』を録音。60年にはキャンボール・アダレイと共演し、それが縁でNYへ進出。コールマン・ホーキンス、ユセフ・ラティーフやデクスター・ゴードン等と共演するなど、以降もソロを始め多くの名盤と名演を残す。75年以降、ハード・バップ・ブーム再燃に乗ってザナドゥ・レーベル等に作品を残し、76年4月、チャールズ・マクファーソンやジミー・レイニー等と初来日を果たす。79年より、自身の主宰によるワークショップを開始。82年、NYに「Jazz Cultural Theatre」を設立。90年代前半に、一時病に倒れるも見事復活。その後も、精力的に演奏活動続ける傍ら、若手ミュージシャンの育成にも力を注ぐ。「American Jazz Masters Fellowship」など多くの賞も受賞しており、バド・パウエル以来の「ビ・バップの真の伝道師」と称される偉大なピアニスト。現在もNYを拠点に活躍中。【バリー・ハリスの公式サイト (The Official Barry Harris Website)】<http://www.barryharris.com/>

記念すべき1st リーダー・アルバム

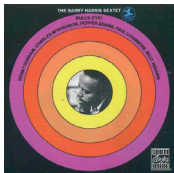


Breakin' It Up Barry Harris (ユニバーサル:UCCU-5187)

Barry Harris (p), William Austin (b), Frank Gant (ds)

1. All The Things You Are 2. Ornithology 3. Bluesy 4. Passport
5. Allen's Alley 6. Embraceable You 7. SRO 8. Stranger In Paradise

バリー・ハリスの迷るビ・バップ魂を聴け！



Bull's Eye! Barry Harris Sextet (OJCCD-1082-2)

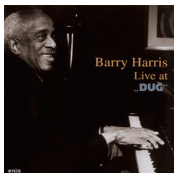
Barry Harris (p), Kenny Dorham (tp), Charles McPherson (sax), Papper Adams (bs), Paul Chambers (b), Billy Higgins (ds)

1. Bull's Eye 2. Clockwise 3. Off Monk 4. Barengo 5. Off Minor
6. Oh So Basal

1958 年録音。B・パウエルやT・モンクの影響を受けながら、大物ジャズマンとの共演を重ね、ビ・バップを追求し続けるハリスが満を持して録音した初リーダー作。地元デトロイトで培ってきたジャズ魂を心置きなく解き放つ瞬間が来たとはかりに、ビ・バップの名曲を中心に気持ち良いほどのアドリブや名フレーズが炸裂！ 十八番の「オール・ザ・シングス・ユー・アー」、「オーニソロジー」をはじめ、作品全体に響き渡る職人的味わいは格別！ オリジナルの「ブルージー」「SRO」にも、玄人好みの渋いリー・ハリス節が満ち満ちる。F・ガント (b)、W・オースティン (ds) の好演も光る。バップ継承の歩みはここから始まった。

K・ドーハム (tp)、C・マクファーンソン (ts)、P・アダマス (bs) の3 管をフロントに据えたセクステットによる熱気ムンムンの BeBop セッション。尊敬するバドを偲んで書き上げたオリジナル「Clockwise」、モンク作曲の「Off Minor」の2 曲では、この録音の約半年後 69 年 1 月に急死したP・チェンバース (b) と、B・ヒギンズ (ds) とのトリオでのブレイが聴ける。バド・パウエルの死 (66 年)、エルモ・ホープの死 (67 年) を経て、68 年に録音された BeBop 魂継承を胸に誓ったハリスの渾身の一枚。「Bull's Eye」「Oh So Basal」で聴かせるハリスの BeBop 魂〜ジャズの未来を見据える『狂猛な目』を感じて欲しい！

その雰囲気、この臨場感、あのピアノが直ぐそこに…



Barry Harris Live at "DUG" Barry Harris (日本クラウン:CRJG-9131)

Barry Harris (p), Kunimitsu Inaba (b), Fumio Watanabe (ds)

1. Luminescence 2. Somebody Loves Me 3. No Name Blues
4. Oblivion 5. It Could Happen To You 6. Cherokee 7. On Green Dolphin Street 8. I Got Rhythm - Rhythm A Ning 9. East Of The Sun 10. Nascimento

1995 年に新宿のライブハウス「DUG」で行われたピアノ・トリオでのライブ録音。稲葉国光 (b) と渡辺文男 (ds) を従え、雰囲気抜群の空間に響く円熟味タップリのハリスのピアノが、極上のジャズを紡ぎ出す。ラストを飾る「Nascimento」はハリスの代表作で、近年のライブではお馴染みのナンバーだが、手拍子と大合唱で会場が一体化する様子は、ジャズを聴かせるだけでなく、ジャズを楽しませるハリスならではの心意気・人間味が凝縮されている。その他、「Luminescence」「No Name Blues」「Oblivion」などバリー節が詰まった名演が並び、その味わい深いピアノが身近に感じられる作品。ジャケットの笑顔もいい！

“マイ・ジャパニーズ・サン”

昨年 12 月 15 日の誕生日で 76 歳となった現在も、NY を拠点に自身の演奏活動と若手音楽家の育成に全精力を注ぐバリーさん。恐縮ながら私的には、「My Japanese Son」と呼んで貰っていたほど親しくさせてもらった。ジャズを通しての関係というよりは、「ウェーターとお客さん」の間柄という点で、非常に珍しかったのかもしれない。特に思い出すのは冬の夕刻。筆者がお世話になった NY の「KODAMA レストラン」に、少なくとも週の半分は足を運んでくれた。厚手のコートに真っ赤なマフラー。肌を突き刺すような寒さに身を屈めながら 4 つ折にした新聞を小脇に挟んでゆっくりと歩いて来る。窓越しに微笑みながら軽く手を上げ、劇場が立ち並ぶ通りに面した 2 人用のテーブルにポツンとひとり静かに腰を掛けるバリーさん。緑茶を嗜みながら、大好きなお寿司、ほうれん草のおひたし、(特別に) 豆腐とワカメが多めに入った味噌汁等をおいしくは人懐っこく満足そうな笑顔で帰っていったバリーさん。私にとっては偉大なジャズマンとよく以上に特別な想いのあるジャズマンのひとりだ。どうか末永く、いつまでも元気に、その粋なピアノを聴かせ続けて欲しい。

映像で見るビ・バップの魂

“ビ・バップの真の伝道師”バリー・ハリスのピアノを映像で味わうなら、1999 年に製作されたビ・バップを解説しながらピアノを弾くバリー・ハリスのドキュメンタリー映像『Spirit Of Bebop』(Eforfilms) や 1989 年に製作されたセロニアス・モンクのドキュメンタリー映像『Straight, No Chaser』(Warner) などがお薦め！

ジャズ・ピアノの師

長年に渡り音楽家の育成に力を注ぐバリー・ハリスを師と仰ぐミュージシャンは世界中に存在する。日本のミュージシャンでも、クニ三上、国府弘子、近藤大地、八木隆幸、永見行彦などその魂を受け継ぐジャズ・ピアニストが多く活躍している。その中でも、20 年以上に渡り、バリー・ハリスの音楽を敬愛・追及してきた札幌在住のジャズ・ピアニスト、ジャズ・クラブ「SALOBOAT」のオーナーでもある福井良を忘れてはならない。昨年 11 に札幌・東京で福井氏自身のプロデュースにより「バリー・ハリス・トリオ」コンサートまで開催された。11 月 6 日の赤坂「B flat」でのコンサートを拝見したが、本当に素晴らしい！ 互いのジャズに対する愛情や人柄を偲ばせる。それはそれは感動的なコンサートだった！！